屋根概說（五）

文學士　藤田元春

九、其他の屋根

以上述ぶる所は主として我國もしくは東洋に存する屋根に關してのべたのであるが、緒言の中で分類した方錐の急なゴシク風の尖塔とか、圓屋根又は葱頭風のものに至ては概觀すれば、我國は勿論過去の東洋には無かつたものらしい。

過去の日本には猶この外に大陸屋根といふ風の頂上の平い又は緩漫な波狀の土の屋根や或は南支那から暹羅へかけて殿宇の特色をなしてゐる飛簷式と稱する軒の無暗にそりかへつたのも少ない。

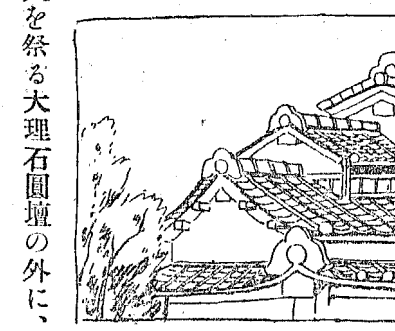
第三十圖

蘇州寒山寺碑亭

附圖第三十は蘇州寒山寺の碑亭で楓橋夜泊の詩碑が立つている、雨よけであるが軒のそつたのが面白いのでこゝに出したのである、此圖の瓦屋根は瓦の本葺のやうに見ゐるがこれは日本のやうな丸瓦でなくて平瓦と同じ形の、瓦せんべいといつた菓子の形のものを、何枚となくかぶせたものである、支那には本葺のかはりにこの形の弧瓦を牝牡交互にかさねるのである。日本ではこの形式の瓦は勿論唐樣建築の外屋根にこういふ弧形を出すことが

少なく、入母屋の破風口とか、檜皮葺殿堂の隅棟の葺き合せ等に、多少とも「てりやね」氣味のカーブを出す位が關の山で、神社建築で神明造の流れの屋根、或は鎌倉時代以後の唐破風などに美はしい緩曲線を出してゐるに止まり、民家としては殆んどすべてが直線の手法を一歩も出でない。しかしこの直線を應用してマンザートに似た勾配の違つた屋根二つを組合せて凸形二段屋根をつくつたものが河内にある。就中北河内で門眞村の幣原坦氏邸の如き其尤なるものである、附圖は幣原氏の家に似た北河内郡菅原村長尾の寺島氏の邸で、これを臺棟づくりといひ、茅は本葺で厚さ四尺に達する。日本民家の屋根の中で尤も高尚で尤も高價なものゝ一つである、今氏はこの種の屋根を同じく河内の國暗峠附近で見、其の繪をかいて、評して

第卅一圖



北河内臺棟つくり切妻
菅原村長尾寺島氏邸

これは特に設計して作つた別莊ではなく、この地方の極くあたりまへの農家である云々

と記してゐられるが、實はあたりまへの家でなくて素封家でないと作らない屋根である、さきの「つのや」の工夫の外に恐らくこの凸形二段屋根は、日本の農民の工夫した尤も優美な屋根と見るべきでなからうか。

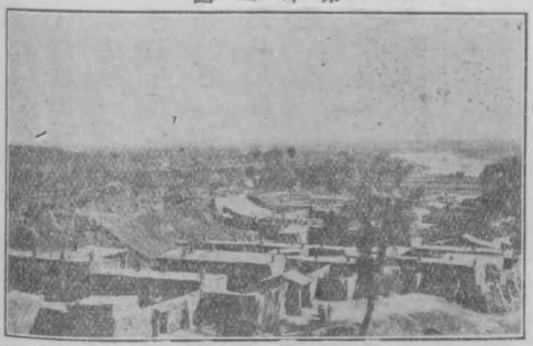
猶この外に支那では、北京に天壇といふがある、この天壇は天を祭る大理石圓壇の外に、皇穹宇といひ又祈年殿といふ二つの圓いプランの大建築物があつて、

圓錐形の屋根を持つてゐるのが、北京での特種の屋根として世人の注目する所となつてゐる。

日本でも過去にこの種の圓堂をつくりたい希望はあつたと見ゐる、しかし圓い屋根は得つくらないで、奈良の南圓堂の如く、名目だけは圓といひながら實は八角のプランにしてゐるので、屋根も三角錐の集りになつてゐるに止まる、要約すれば我國の屋根は直線を主體として、稀にてりやねむくりやねのカーブを加へてゐるに過ぎないで、外國の如く豊富な曲線の應用は少い、しかし明治五年はじめて東京銀座通に西洋風築建の煉瓦建が入つてこの方、京濱京阪の間ではいろ〳〵流儀のかはつた屋根が見られる、鐵筋コンクリートの平屋根をはじめ、マンザート屋根などもあれば、或はゴシク風の屋根やドームが出來だしてきた、明治時代に出來た六甲の二樂莊のごとき其好例であらう最近の文化住宅とやらいふものも、やはりこの手法を用ひて間取もかはり、屋根も形式傳統を破ることになつた。

思ふにかの大陸屋根なるものは勿論雨の少い砂漠地方の屋根で、波斯やアラビヤ邊の廢墟の到る所に之を發見するのであるが、支那でも北方にゆくと、この風が多く張家口から包頭附近の土屋はすべてこれである、（附圖第卅二）併し雨の多い所にゆくと屋根が急になる、即ち江南から山東は片流、切妻又は入母屋の急な屋根に變るのを例とする。

第卅二圖



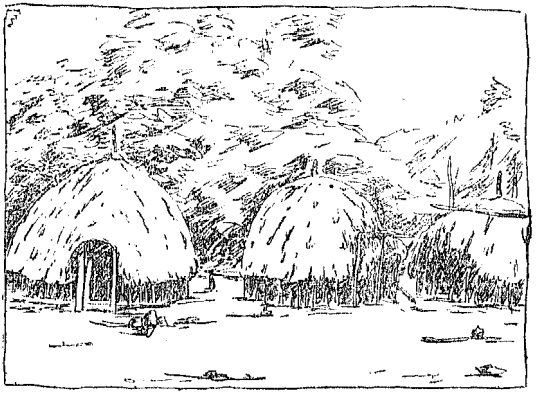
包頭郊外民家

平屋根が大陸乾燥地に生じたと同じやうに圓い方の屋根も亦西方のものである。蒙古人の住宅を平地泉の北方でみると蒙古苞（ツルケクル）といふ天幕の原形を失はないで、平屋根と圓筒形の土屋とを併せ有してゐる、蓋し圓屋根は蒙古では天幕の形の保存である、併し支那へこの圓屋根を將來したものは、蒙古人でなくて多くは淸眞寺と稱する所の回教建築である、遥羅、ビルマから印度にかけて、多くの堂塔が複曲線を有し、又はドームを有してゐるのもやはり回教建築の影響である、回教建築の特長はアーチの應用の多いことであるが、回教徒のアーチはずつと古い波斯薩棚王朝からうけついだものだ、古代のローマではエトルスカンが初めてアーチを用ひたと稱せらる、このエトルスクは東方から之を傳へたらしいので、つまりアーチなるものは其起源がメソポタミヤの古代にあると考へらるゝものである。

回教徒出るに及んで、或は圓筒或は葱頭の屋根と自由自在にこれを用ゐて、西は太西洋より東は太平洋岸に、北はシベリヤ内部より南はアフリカの内地にまで、其の宗教の廣布と共に回教建築の形式を廣めたのである、回教の傳來以前に支那に西域との交通があつてエンタシスなる柱の如き奈良朝以前に東漸した、次で鎌倉時代に唐樣の建築が傳はり瓦燈口などといふアーチ形の窓が禪宗と共に我國にも入つた。しかし到底回教建築に見らるゝドームは我國には入らなかつたものである。

然らばこの圓い屋根はどこに起つたかと云ふに、回教建築の始祖をなすものは、シリアのハウラン沙漠の中に起つたガサニード侯國の建築に始まるといはれる、蓋しサラセン人は岩石と砂土とのみを材料として、やはり天幕の形からこれに到達したものと考へられてゐるらしい。（工業大辭書

第卅三圖



バンガラの民居

サラセン建築參照）しかし必ずしも天幕生活と限るにも及ばぬと考へるのは、現にアフリカ、スーダンのYambio人及アフリカ森林中に住むBangala土人の如き、全く草でふいた圓屋根（ピーハイブ）の中に居る、蓋し木の枝を撓めて圓い屋根をつくることは尤も原始的な住宅として夙に西方に出現してゐたのであらう、又圓錐形の屋根は北方ザンベジの土人又はNigeria北方の土人の作くる所であり、同じくコンゴーの北境にはUbangiの土人の如く草小屋の圓錐の尖塔をつくること恰も印度建築に見るが如きものがある、それは恰も我國の田舍で稻藁で積上げた圓錐堆のやうなものである。思ふにかゝる西方の原始的の簡單な圓屋根の發達したものが、かのアラビヤ人のドーム建築であるのであらう。予は建築に關しては勿論全くの素人であるから、建築の細部に於ていかやうの東西の區別のあるかを知らない、たゞ感じたまゝを備忘錄として記すに止まる、この點讀者の寬恕を仰いでおく。

さて以上で大方屋根といふものゝ形式はのべ終つたのであるが、更らに我國の民家を研究せんとする上に於て、材料の上から見れば主として茅葺、板葺、瓦葺の區別がある、各地に其分布も廣い故に、今この各々に就て概說して以て一先づ本篇を結末にしやうと思ふ、もしそれ屋根の細部に至

つては改めて之を論じうる機會を待つのみである。

別記

瓦燈口、くしがた、倭訓栞に曰く平治物語にくしがたの穴に人影のしつると見え、徒然草に閑院殿のくしがたの穴と見えたり櫛形の義、俗に云ふ瓦燈口是れ也、昔の櫛の形今と異れりとぞ。

和漢三歳圖會、八一、圭窩、閨門、圭竇燈（カトウ）今云瓦口小門、閨音規宮中門、小者日レ閨上圓下方如圭故曰閨門、禮記儒行注云、圭窩門旁小戸、穿レ牆、爲レ之、上鋭下方而如レ圭故名、又名圭竇音豆、按俗云瓦燈口戸是乎、瓦燈即瓦器、上鋭下廣、以納燈燭、似其形故名之、今茶道之圍室設小戸、多瓦燈口也、とあるが禪宗と共に傳來された瓦燈口は、かの清涼殿のくしがたとちがつて、上方のアーチ形がふかく火焔狀をなしてゐる、これが我國建築上に影響した回教建築の唯一の痕迹らしい。

一〇、草葺

我國では古來草屋が普通であつた、神代に鵜葺草葺不合尊といふ御神の名さへあるのであるから皇室の御祖先でも草屋に住せられたのである、古事記を見ると訓葺草云加夜とあるにより、葺く草を總じてカヤといつたのである、草野姫尊とあるをカヤノヒメノミコトと申奉るから或はカヤとは草といふ語の總名のごとくにも聞える、けれども上古から屋を葺く草をカヤと云つたと見る方が正しいらしい、しかし通常今日になつて我々がカヤと云ふ語を聞くとそれは葺草として尤も多く用ひらるゝ茅（カヤ）だといふ風に考へるが、其又茅にも種類がある、春期ツバナと云ふ白毛の花を出すは茅萱（チガヤ）であり、山の奥へゆくと刈安（カリヤス）と名づくる菅茅（スゲガヤ）もあれは、秋期尾花をさかす所の薄（スヽキ）も亦カヤである、蓋し茅（カヤ）には種類が多い、これらの多く用ひらるゝカヤの類は原野河畔もしくは山の林空地に產するもので、適宜に地の宜しきに應じて葺草に用ふるので、予の如き山間のものはカヤと云へば尾花の

さくススキだと考へることに慣れてゐる。かの兼好が

一夜ねしかやのまろやの跡もなし、夢かうつゝか宇津の山越

とよんだところの山間の茅はこれである、この種のチガヤ、ススキの類は普通に山萱と稱せらるゝしかし我國は豊葦原の名に負ふごとく古來海邊湖畔に多くの蘆葦が自生する、これ又以て萱草の好材料である新古今や、續古今を見ると旅ねするあしの小屋にて見るときもとか、夕ざればあしのまろやにとか或はわがいほは難波なるあしのしのやとか歌つて、至る所にあしの宿などゝ記されてゐる草屋がある、この方はかのかやのまろやと違つて、全く蘆でふくので俗に海萱といふ者である、古事記傳十七には新井氏の說だとて鵜萱草といふは日向の國で海岸の荻である今日うみがやといふからそれが昔のウガヤであらうと記してある、難波の葦は伊勢の濱荻といふとほり今日も蘆を海萱といふのである。かやうにして我國は山間海岸何れもこの萱草には事缺かないのが例であつたが、近年人口增加に伴ひ土地の開墾、もしくは河川の修理等日を追ふて進步したので、萱草を上記の山萱又は海萱にするといふことは餘程困難を感ずるやうになつた、例令ば大阪平野で茅の產地といへば御幣島稗島一帶のデルタに產する所謂海萱であり、山城巨椋池畔では多くの過去の葭島といつた洲の湖萱、それが誠に質の良いふきくさであつたのである、併し今日は新淀川附替、巨椋池開拓等のために、これらの多くの產地が全くなくなり、同時に其地方の開發が蘆の自生地たるを許さなくなつてきた。

尼ケ崎附近は今でも多少萱草の產地であるが、其質は過去の御幣島產に及ぶべくもない、故に蜿

蜒たる淀川堤防のそこここに產する葭蘆を集め、漸く數年の後其材料を充たすに足る有樣で、巨掠池中の葭島のごときも、すべて稻田になつたが、獨り小倉村伊勢田にカヤ吉と稱する家がある。（北川玉城氏）こゝは今も昔のごとく自家の葭島を所有してゐて、同時に先祖傳來萱の用達として諸家に出入し、皇室の御用又は神宮御用を奉仕してゐるのである。故に平民でこの葭島產の材料を以て家をふくといふやうなことは、今日では餘程贅澤であつて、山城平野の中でも特別の名門素封家にして且累代カヤ吉を出入としてゐる家でないとこれをつくることが出來ない、そこで當然このカヤ葺といふものは、瓦葺よりも却つて高價となつてきだのである。故に地方一般では、葺草として稻藁または麥藁を用ふるやうになつた、或は茅がなくて笹があれば笹葺にするといふやうに各地各其の手近に得られる材料を選ぶといふのが現狀である、滋賀縣伊香郡蒲生郡邊では茅の不足した結果として、稻藁を以て屋根をふくが、丹波攝津邊では麥藁を以て茅に代へる所が多い。茅葺だといつても茅の不足した丈けは麥藁を以て之を補ふ、それでも猶葺草に不足した塲合に、その不足のまゝに簡略葺といふ葺方にするものがある、これは丹波邊で鳥羽（トバ）葺といふものである、今和次郎氏の民家の研究に土佐海岸地方の特色として、疣のある屋根といふのを記してゐられるが、茅をふくに當つて捶竹にし

第廿四圖

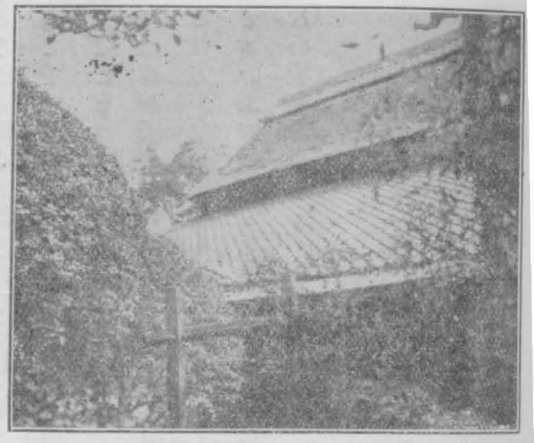
丹波船井郡須知　葺トバ屋母入

ばりつけた繩目は、ふき艸の多い屋根では、自から其上部にくる葺脚(フキアシ)のためにかくれて、其針目が保護されるけれども、草の薄い場合にはさうはいかない、そこで茅を下の捶竹に結びつけた針目をかくすために屋根の上部に一束づつの針目覆をのせる、しかるときはそれが疣になつて現はれる、附圖第卅四は其疣が半ばくさつたので目につかないが、このトバ葺なるものゝ一例である（丹波船井郡所見）

幸に茅の材料が多い時にはかゝる疣をつくる必要もなくて完全な葺方になる、この際新しい草と古い葺草とを併用すると屋根に虎皮のごとき段々縞が出來て却つて美觀を增すのが例である。茅の尻を鋏んで整へる際に屋根の末端を部厚に見せるやうに、地平に對してある角度を持つた屋根をつくることは近畿の特色であるが、屋根の末端を地平に併行に鋏んで一見して屋根の部の厚さを現はさないのが東國に多い、これは必しも左樣と定つたわけではないが、各地各其特色を有してゐることゝ思ふ。

茅葺に切妻、入母屋、四阿の別があるが、予の見たる茅葺として最も進んでゐるのは其ふき艸の多い地方に出現した葦屋根で北河内郡門眞村の六人衆と呼ぶ其地の地主連中の建てゝゐる大和屋根又は臺棟造りといふものである、六人衆は自から財産もあり格式も高いので百姓又は下衆と稱するものゝ民家よりも、一段上等な家屋をつくつたので、間口十三間奥行六間にもあまる宏大な葦葺の家屋をたて、其宅地には土藏及小屋、門長屋練塀の類を圍ぐらして宛然一城廓の形をなしてゐる、就中其庄屋であつた野口作右衛門氏の母屋のごときは大和棟塀造茅葺であつて（附圖第三十五）茅の

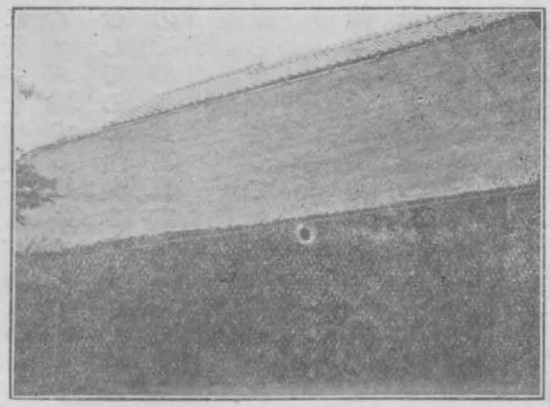
第三十五圖



河内門眞野口氏屋根

厚さ驚くべし五尺にも達してゐる、門眞一番の幣原坦氏の宅の如き同じ類に屬する、四尺以上の厚さある厚葺はこの門眞のみでなくて淀川を挾んだ畿内平野の農家の特に名門であつた家に多い、今日これをふくには數千束の葺草を要する、全部を瓦でふくよりも非常に高價につくといふことである、見た眼にも檜皮葺の薄いのよりは遙かに優美であり且高尚でもある。中で尤も優秀なるものゝ一例をあぐれば、山城綴喜郡上津屋の豪農伊佐郷右衛門氏の邸である、記錄によれば少くとも明和四年以來火災に逢つてゐない古い家で大和風の臺棟造である、野口氏と同樣に湖萱(ウミカヤ)で葺てある、其材料は前記巨椋池畔伊勢田のカヤ吉事北川氏が、祖先相傳で差入れる、注文をしないでも古い帳面をくつて北川氏の方から今年は何束送りますと云つ

第三十六圖



蘆厚葺
綴喜郡伊佐邸

てくるのださうな、この家の屋根は厚さ六尺五寸、十年ごとに新茅を挿入する、あまり部が厚いので下から葺かへが出來ない、巨椋池の葭島に產する特產のあアヤメ稱する細茅とシノと稱するやゝ太い蘆とを交ぜてふくので、細美帶紅白色の葺草に靑い苔がむしてゐる優美さに至つては恐らく天下稀觀のものであらう、カヤ葺の最も進步した極致だと思ふので特に其寫眞(第卅六圖)をかゝげておくのである。

しかしかやうな近畿の高尙なカヤブキも其葺草が段々と生產しなくなつてきたので、これを維持することも漸く困難であるらしい。

そこで近來地方にゆくとこの入母屋茅葺の表面を亞鉛板の張りボテに圍んだ家が增加してきた、或はこれをタールで直黑に塗つたのが多い、格好は過去の入母屋をそのまゝに表現はするが、雨ふりには音が騷がしい、見る目には殺風景である、寧ろ瓦葺にしてほしいと思ふがこれも亦時代の變遷で仕方がない、尤も甚しいのになると亞鉛でなくて、スレートの下にしく瓦下の紙(俗に便利瓦などゝいふ)のまゝで黑い屋根にしたのがあつたりする、(江州志那所見)これ亦時代の變遷で仕方のない現象であらう。(未完)